

集成館事業において薩摩焼が果たした役割

渡辺芳郎 (鹿児島大学法文学部)

島津斉彬(1809～58年、藩主：1851～58年)：欧米列強に対抗するため近代工業の育成を企図
＝集成館事業

第1期集成館

嘉永4年(1851)：斉彬藩主になる→集成館事業の開始
安政元年(1854)：日本初の熔鋳炉完成
安政4年(1857)：2号反射炉完成
同：佐賀藩士来訪→『薩州鹿児島見取絵図』
安政5年(1858)：斉彬急死→集成館事業縮小

文久2年(1862)：生麦事件(薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件)
文久3年(1863)：薩英戦争で焼失→近代化の必要性の再認識

第2期集成館

元治元年(1864)：機械工場(尚古集成館本館)着手
慶応元年(1865)：機械工場操業開始
慶応3年(1867)：紡績工場・技師館(異人館)竣工
明治4年(1871)：官営工場となる
明治10年(1877)：西南戦争で焼失

集成館事業において島津斉彬が求めた薩摩焼の役割

- (1) 反射炉用耐火レンガの生産
- (2) 海外輸出用陶磁器の生産

文献に見られる島津斉彬と薩摩焼との関係

『島津斉彬言行録』市来四郎編 明治17年(1885)

焼物ハ必用ノモノナレドモ用ニ足スニハ何ゾ美麗ヲ尽スニ及バザルナリ、然レドモ外国貿易追々開ケルニツイテハ、物産開発ヲ先ンゼザレバ其詮ナシ、国産ノ陶器ハ夷人モ称美セリ、仍テ其タメ製造ヲ精良ニスルノ見込ナリ、幸ヒ国産ノ白土ハ(指宿土、霧島土)陶器ニ宜シキ由ナレバ、製造ヲヨクスル時ハ佐賀ノ磁器同様ノ産物トナルベシ

『斉彬公史料』嘉永5年(1852)3月16日

騎シテ、伊集院苗代川ノ陶磁器製造ヲ覧玉ヒ、錦手焼ノ改良、及ヒ今里(伊万里)焼ヲ創ムヘキノ旨ヲ令シ玉フ

『蘭系織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴』明治18年(1885)

朴正伯長男 朴正官

安政年間藩主斉彬公鹿児島磯御仮屋構内ニ陶器所被召建、陶磁器ノ製造被遊候砌、安政四年六月磯焼物所へ御招呼相成、御前ニテ画附ケ方ハ勿論、焼方迄被仰付、画風ヨリ画ノ具色合等ノ更迄善悪ノ御沙汰被遊候ニ付、刻苦焦慮シ、漸ク御意ニ叶フ処ニ至リシハ、安政五年三月ナリ。此間数度難有御褒賞等有之。同月二十三日苗代川ニテ盛ニ精工ノモノ製造可仕旨御沙汰被遊御暇被下。同月二十八日帰村シ、夥多ノ御用品製造方指揮シ、又毎月或ハ隔月一周間計、磯御焼物所へ御招呼、親シク陶器ノ品位御沙汰被遊候間、御暇被下候。

※朴正官：苗代川において色絵陶器の生産を始めたと伝えられる陶工。慶応3年(1867)パリ万博に錦手花瓶を出品

『薩州鹿児島見取絵図』に描かれた礮窯

近世薩摩焼における連房式登窯跡

燃焼室+10~11室焼成室の連房式登窯

→近世の薩摩焼窯でも大型に属する=産業志向の強い窯

窯跡	所在地	系統	年代	窯構造	室数	規模
堅野冷水窯	鹿児島市冷水	堅野	17~19c	連房式登窯(直)	7	14.48m
礮窯	鹿児島市吉野町礮	堅野	19c後半	連房式登窯	10~11	
山元窯	始良市加治木町木田	龍門司	17c第3四半期	連房式登窯(直)	7	約14m
龍門司古窯	始良市加治木町小山田	龍門司	18~20c	連房式登窯(直)	8(11)	約22.7m
元立院窯	始良市西餅田	元立院	17c後半~18c末?	連房式登窯?		
弥勒窯	始良市加治木町弥勒	磁器	18c末	連房式登窯(扇)	4+α	
平佐北郷窯	薩摩川内市天辰	磁器	18c末	連房式登窯(扇)	3	13-14m
平佐大窯	薩摩川内市天辰	磁器	19c	連房式登窯(扇)	12	約46.3m
平佐新窯	薩摩川内市天辰	磁器	19c第2-3四半期	連房式登窯(扇)	4	約19m
南京皿山1号窯跡	日置市東市来町美山	磁器	1846年~明治初	連房式登窯(扇)	7	約30m
南京皿山2号窯跡	日置市東市来町美山	磁器	1846年~明治初	連房式登窯(扇)	5~6→11~12	

(渡辺 2004、深港・渡辺 2016 より)

耐火レンガ生産と薩摩焼陶工

『江夏十郎文書』安政2年(1855)

「天草石焼方之形行ハ皇(星カ)山仲次方ヨリ委細申上候義ト存候」

※星山仲次：朝鮮陶工・金海の系譜を引く堅野窯陶工。代々襲名。この仲次は第七代か。
→耐火レンガ焼成に薩摩焼陶工の関与

安政元年(1854)7月29日付文書

一、新調反射炉焼石(=耐火レンガ-渡辺注)之儀、此節江夏十郎より(井上)庄太郎迄申遣候、是は道中より(重久)玄碩江申付、此度は天草一味にて焼石調候様にと申遣候事にて、不相分訳は無之候、玄碩掛合行違候て、未た手当無之哉と存候、左候はば早々手当申付、焼石之分は天草にて取建候様、早々天草土取寄候様可致候、尤上之方格別火之不当処は、星山之土組相用ひ宜敷、此度委細十郎迄庄太郎より掛合申遣候、呉々も未天草土不取寄候はば、早々手当可致候」

以上より

② 耐火レンガ生産に肥後の天草陶石を使用

② 「星山之土組」(土の配合)は耐火レンガに不適當(あまり火の当たらない上の方であれば使える)

※安政元年：1号反射炉が失敗し、2号反射炉建設を模索している段階

嘉永4年(1851)：城内に「御花園製錬所」を開設。西洋式釉薬の研究を始める

嘉永5年(1852)：斉彬、苗代川を訪れ、錦手改良・磁器生産を命じる

同年：1号反射炉着工

嘉永6年(1853)：1号反射炉竣工→耐火レンガが溶けて失敗

「星山之土組」(堅野窯の陶器技術)が失敗の原因か?

安政元年(1854)頃：天草陶石の導入を計画

→磁器焼成技術の導入(在地磁器工人の参画)

安政2年(1855)6月：礮窯開窯?

安政2年(1855)末頃：耐火レンガ生産の目途がたつ

安政3年(1856)5月までに耐火レンガの生産の成功

安政4年(1857)5月：2号反射炉完成

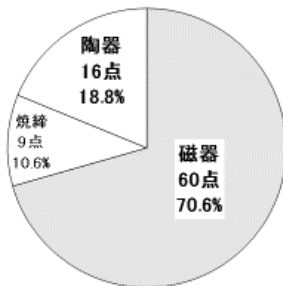
同年6月：苗代川の朴正官が礮で釉薬などの開発に従事

考古学資料から見た礮窯の製品

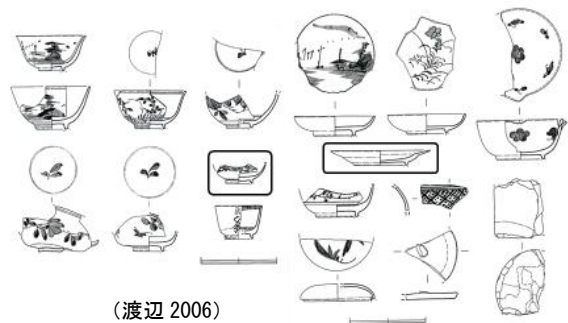
『薩摩焼の研究』における採集資料

種類1	種類2	器種	点数	点数2
磁器	染付	飯碗片	2	60
磁器	染付	汲出茶碗片	6	
磁器	染付	小皿片	2	
磁器	染付	蓋片	1	
磁器	染付	その他	39	
磁器	白磁	残片	10	
焼締	焼締	残片	9	9
陶器	鉄砂釉	土瓶片	10	16
陶器	鉄砂釉	土瓶蓋片	1	
陶器	土灰釉	文字入り茶碗片	1	
陶器	土灰釉	残片	4	
合計			85	85

(田澤・小山 1941 より)

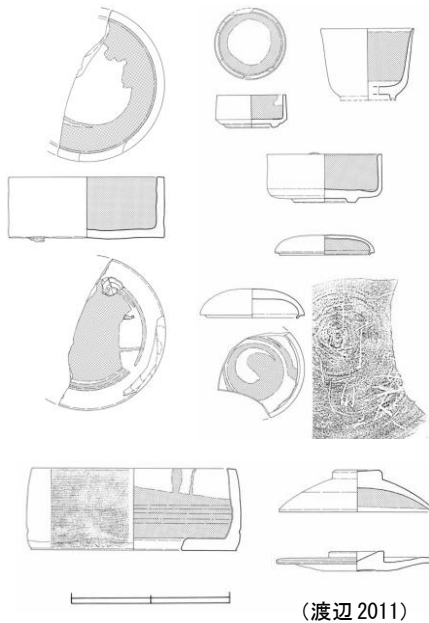


礮窯跡推定地採集資料



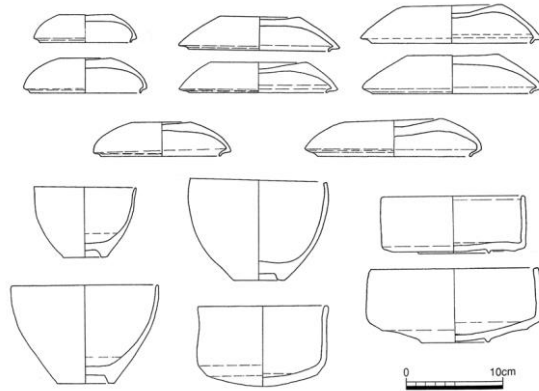
(渡辺 2006)

南京皿山窯跡採集の磁土製匣鉢



(渡辺 2011)

佐賀県有田町年木谷 3号窯跡出土の磁土製匣鉢



(村上・野上編 1997)

年木谷 3号窯跡では「葺春亭三保造」銘の「卵殻手」生産
 →幕末の輸出製品
 →磯窯跡採集の器壁の薄い磁器に類似する

1858 年に来日したイギリスの外交官エルギン卿の滞在記（オリファント（岡田訳）1968）
 長崎における記述

「きわめて薄い陶器 egg-shell China もヨーロッパの市場向けに製造されたものである。それは主に肥前 Fizen や薩摩 Satsuma で作られるきわめて精巧な品で、日本人自身には使用されていない。江戸ではこれほど薄手のものは手に入れることはできなかった」（p. 49）

「ヨーロッパ人の要望するきわめて薄い陶器は、大量に売られているが、これは主に肥前と薩摩 Satsuma の地方から供給されるものである」（p. 58）

島津斉彬は色絵薩摩の海外輸出を考えていたか？

色絵薩摩がヨーロッパにおいて注目されたのは島津斉彬の死後（松村 2011 参照）

→斉彬の時期に色絵陶器が有力な輸出品になるという認識はうまれたか？

→貿易振興を目指した斉彬にとって、むしろ天保年間（1830～1843）に再輸出が始まった有田磁器の方が、輸出の「モデル」として選択されやすかったのではないか？

表 1 主要な万国博覧会と日本の出品との関係（20 世紀初頭まで）

年代	万国博覧会名	特記事項
1851年	ロンドン万国博覧会	オランダの F. ゼーヘルス商会が日本の屏風を出品。
1853年	ニューヨーク世界博覧会	オランダからの展示品に日本の品物が含まれていた。
1855年	パリ万国博覧会	オランダ展示部門に日本の品物 80 点が含まれていた。
1862年	ロンドン万国博覧会	ラザフォード・オールコック、神奈川英国領事ハワード・ワイズ大尉が日本の品々 614 点を出品。
1867年	パリ万国博覧会	幕府と薩摩藩、佐賀藩が参加。徳川昭武を正使とする使節団が渡仏。
1873年	ウィーン万国博覧会	日本は名古屋城の金鯱、鎌倉の大仏の模型、天王寺の五重塔などを出品。
1876年	フィラデルフィア万国博覧会	日本は前例のない大きな規模で参加。
1878年	パリ万国博覧会	日本の美術工芸品が注目され、ヨーロッパの工芸品にジャポニズム的傾向が強まった。
1889年	パリ万国博覧会	日本の展示には特に注目すべきものはない。
1893年	シカゴ万国博覧会	日本は平等院鳳凰堂を模した建物などを建設。
1900年	パリ万国博覧会	事務官林忠正は古美術展を開催し、日本の職人に建物、茶室、庭園などを作らせる。
1904年	セントルイス万国博覧会	日本は金閣寺や京都御所の紫宸殿も模した建物を配した日本庭園を展示。

* ジャポニズム学会編「ジャポニズム入門」、吉田光那編「図説万国博覧会史」より抜粋

(坂本 2009 より)

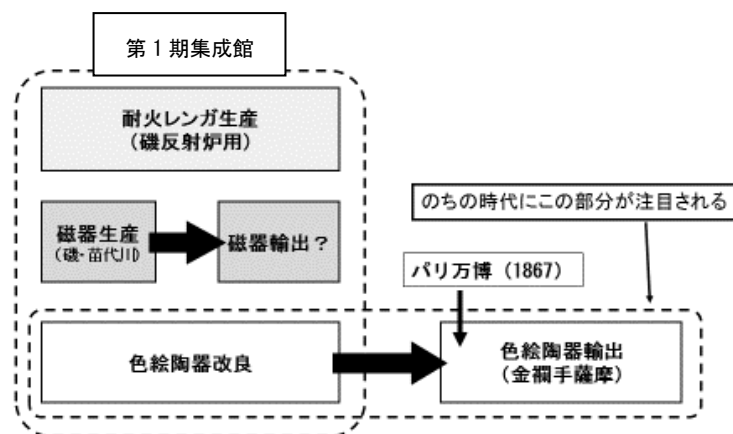
まとめ

<耐火レンガ生産>

- (1) 島津斉彬が礮窯を築いた最大の目的は反射炉用耐火レンガ生産であった可能性が高い。
- (2) 最初は「星山之土組」（在地粘土か？）で製作を試みるが失敗し（1号反射炉）、天草陶石を使用した耐火レンガで成功する（2号反射炉）。
- (3) 天草陶石を用いた耐火レンガ生産には薩摩焼陶工のうち磁器工人が関与していたと考えられる。

<輸出陶磁器生産>

- (1) 島津斉彬が輸出を考えていた薩摩焼とは、礮窯跡・苗代川南京皿山窯跡採集資料から、卵殻手のような薄い磁器であった可能性がある（有田からの技術導入の可能性）。
- (2) エルギン卿の滞在記に信を置けば、その薄手の磁器は、1858年段階で実際に長崎から輸出されていた可能性がある。
- (3) 斉彬が色絵陶器の改良を試みたことは否定できないが、その輸出を想定していたかどうかは、年代的に疑問が残る。
- (4) 現段階で輸出された薩摩磁器の実物は確認できていないが、今後はその可能性を視野に入れて調査検討する必要がある。



<参考文献>

- オリファント、ローレンス（岡田章雄訳）1968『エルギン卿遣日使節録』雄松堂出版
- 坂本久子 2009「日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会とウィーン万国博覧会の関連」『近畿大学九州短期大学研究紀要』38
- 田澤金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所
- 深港恭子・渡辺芳郎 2016「幕末苗代川における磁器生産—『御内用方萬留 一番』の検討から—」『東洋陶磁』45号
- 松村真希子 2011「明治期サツマの様相—海外美術館収蔵品の調査から—」『東洋陶磁』40
- 村上伸之・野上建紀編 1997『枳敷窯・年木谷3号窯』有田町教育委員会
- 渡辺芳郎 2004「近世薩摩焼の窯構造」『金沢大学考古学研究室紀要』27号
- 渡辺芳郎 2006「礮窯考—集成館事業における在来窯業の役割—」『近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置づけに関する総合的研究』薩摩のものづくり研究会
- 渡辺芳郎 2011「鹿児島県日置市美山南京皿山窯跡採集の磁土製匣鉢」『考古学と陶磁史学—佐々木達夫先生退職記念論文集』金沢大学考古学研究室
- 渡辺芳郎・金田明大 2012『考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究』鹿児島大学法文学部